

大学生における片づけ動機の探索的検討

目白大学大学院心理学研究科 元井 沙織
目白大学人間学部 小野寺敦子

【要 約】

本研究では、大学生における片づけ動機を明らかにすることを目的に、自由記述による質問紙調査を実施した。調査対象者は、大学生126名であった。自由記述による回答を分類したところ、“片づけをする理由”は“部屋が散らかっている・汚いから”、“片づけによる効果”は“リフレッシュ効果”、“片づけをする時”は“部屋が散らかった・汚れた時”がそれぞれ最も多く分類されたカテゴリであった。また、“片づけをする理由”では“心理的な変化のため”、そして“片づけの効果”では“リフレッシュ効果”や“心の癒し・リラックス効果”、“片づけをする時”では“心理的な変化を求めている時・何かの節目”と、それぞれの質問において心理的な内容に言及した記述がみられた。このことから、片づけには心理的な意味合いが強くあることが示唆された。分類したカテゴリについて、数量化Ⅲ類による分析を行った。その結果、個人が普段考えている“片づけをする理由”や“片づけによる効果”により、片づけを行う契機が異なっていることが示唆された。

キーワード：片づけ動機、片づけをする理由、片づけによる効果、片づけをする時

問題と目的

近年では、片づけに関するマニュアル本が数多く出版され、メディアでも頻繁に片づけが取り上げられている。現代社会において、片づけに関する情報や知識のニーズが高く、“なぜ、片づけられないのか”あるいは、“どうすれば、うまく片づけられるのか”という話題について、多くの人々が関心をもっていると考えられる。

“なぜ、片づけられないのか”つまり、片づけられない要因については、“溜め込み傾向”という概念から検討がされている (e.g., 池内, 2014; 池内, 2018; 土屋垣内他, 2015)。池内 (2014) は、物への主観的な意味付けが溜め込み傾向に繋がることを指摘しており、池内 (2018) では、物に対する過剰な意味付けや執着が物理的な問題をもたらし、それが精神的な問題や経済的な問題、ひいては対人関係に軋轢を生じるといった社会的な問題を引き起こす様

相が確認されている。また、土屋垣内他 (2015) は、日本の青年 (大学生・専門学生) を対象として、欧米における溜め込み研究の標準的な尺度として使用されている Saving Inventory-Revised の日本語版を開発し、溜め込み傾向を有する青年の臨床的特徴について検討している。

一方で、“どうすれば、うまく片づけられるのか”つまり、片づけの方法について検討している研究はほとんど行われていない現状がある。研究がほとんど行われていない背景には、片づけを捉えることの難しさがある。個人により部屋の広さや置かれている物など生活空間の状況は異なる。そのため、個人によって片づけの対象となる物や場所が異なるとともに、片づけの作業方法も異なってくる。つまり、多様化する生活空間において、片づけという作業についての具体的な方法を一つの枠組みで捉えることは

困難である(郷古・金, 2015)。このことから、“どうすれば、うまく片づけられるのか”という点についても、個人の生活空間により見解が異なっているため、片づけの方法について研究が少ない。

そこで、片づけの具体的な方法の提案ではなく、片づけを促す要因が検討されている。そもそも、片づけをしなければ、“うまく片づける”ことはできないため、個人の片づけを促す要因を明らかにすることは重要である。そこで、“どうすれば、片づけを促すことができるか”という観点から研究がされている。例えば、齋藤(2015)は、大学院生の片づけの自己管理に与えるパフォーマンス・フィードバック(Performance Feedback: 以下PFとする)の効果を検証するために、“片づけ管理システム”と称した記録用アプリケーションを作成している。ただし、この研究におけるPFの効果は弱いものであり、社会的強化(人間関係による相互作用)の重要性を指摘している。また、滑田・田村・望月(2017)は、一組の家族(いずれも18歳以上)を対象とした研究から、応用行動分析で用いられるトークンエコノミーの導入と物理的環境の設定によって、片づけが増加することを明らかにしている。さらに、元井・小野寺(2018)は、個人の片づけの行動的特徴をとらえるために片づけ行動尺度を作成し、現在の大学生の片づけ行動に子どもの頃の両親の態度(片づけ要求と片づけ態度)が及ぼす影響を検討している。その結果、子どもの頃の同性の親の関りが、現在の大学生の片づけ行動を促している可能性を明らかにした。

他にも、片づけを促す試みとして、片づけを題材としたゲームの開発がされている。例えば、大即・澤田・坂東・馬場・小野(2007)は、保育においてコンピュータを遊具として幼児に提供する試みの一つとして“片づけゲーム”を作成をしている。また、戀津他(2013)は、乱雑に置かれた本を大きな順に収納していくiOS向けパズルゲーム“ハノイの本”を作成している。いずれも遊びの一環としてこれらゲームを行うことで、片づけが楽しい・面白いといった好印象が形成され、片づけの促進につながると考えられている。

片づけを促す要因は、個人が“どのような理由で片づけをしているのか”という視点からも捉えることができる。中西他(2006)は、児童・生徒が自分専用の個室で“維持・管理の仕方をどう考えているか”など、住生活における意思決定をする際に何を考えているのかを明らかにするために、九州地区の小・中・高校生を対象に自由記述式の質問紙調査を行っている。その結果、片づけて整理・整頓する理由について上位四項目が、①きれいになるなど“見た目”、②物の所在がわかるなど“使いやすさ”、③落ち着くなど“居心地”、④客に見られるなど“人の目”であることを明らかにしている。片づけをする理由は、片づけの動機と言い換えることができる。個人の片づけの動機が明らかになれば、片づけを促すことにも役立てられると考えられる。これまで、片づけの動機について、青年期以降を対象とした研究はみられない。動機や動機づけに関する研究は学習について扱ったものが多いが、学習に対する動機づけは、学校段階の移行に伴って変化することが明らかにされている(岡田, 2010)。したがって、研究対象の年齢が異なれば、片づけの動機も異なる可能性がある。そのため、青年期以降を対象とした研究を行うことで、片づけ動機が年齢によって違いがあるのかを検討することは意義があると考えられる。

また、上淵(2012)によると、動機とは、報酬を得て罰を避ける性質をもった心理的、行動的なプロセスである動機づけを生じさせ、持続させる個体内要因の総称であるとされている。報酬を得て罰を避けるとは、つまり、その個人にとって望ましい結果を得て、望ましくない結果を避けるということである。片づけにおける望ましい結果とは、片づけをすることによって得られる効果と言い換えることができ、片づけをすることによって得られる効果を認識していることが、片づけの動機に関係していると考えられる。

さらに、鹿毛他(2011)によると、動機づけは、より安定した要因(興味や性格など)に規定される一方で、状況にも依存する不安定な現象であり、認知、感情、欲求といった個人内要因が相互に複雑に影響しあう現象であると同時に

に、場やコミュニケーションのあり方といった物理的、社会的な環境要因にも規定される。中谷他(2018)も、動機づけが環境・場面、その場に含まれる対人関係などにも影響されることを指摘している。そのため、片づけをする時がどのような場面なのかという視点は重要である。

これら3つの観点(①片づけの理由、②片づけの効果、③片づけをする時)の関連は、次のように考えることができる。すなわち、“片づけの理由”や“片づけの効果”とは、個人が普段から持っている信念である。そして、“片づけをする時”とは、片づけをする契機となる事柄や条件である。このことから、片づけは、個人の信念(“片づけの理由”や“片づけによる効果”)を前提として、契機となる事柄や条件があった時(“片づけをする時”)に行われると考えられる。以上のことから、“片づけをするのはなぜか”という“片づけの理由”の他に、“片づけにはどのような効果があるか”という“片づけによる効果”と“片づけをするのはどんな時か”という“片づけをする時”を含めた3つの側面から片づけの動機を検討する必要があると考えられる。

本研究の目的

以上の議論を踏まえると、片づけの動機について青年期以降を対象とした研究はみられない。研究対象の年齢が異なれば、片づけの動機も異なる可能性もある。そこで、本研究では、大学生を対象に片づけの動機について3つの観点(①片づけをする理由、②片づけによる効果、③片づけをする時)から探索的に検討することを目的とした。なお、本研究では、片づけを“いらぬ物を減らし、いる物を分類、整頓する行動”と定義する。

方法

調査対象者

東京都内の大学に通う大学生126名(男性52名、女性71名、不明3名;平均年齢18.37歳、 $SD = 1.14$)を対象とした。

調査手続き

2018年6月に大学の講義開始前、または講義終了直前に集団回答形式で調査を実施し、その場で回収した。倫理的配慮として、調査の匿名性と非強制性等を説明した。

調査内容

“次の質問について、あなたの考えを自由にご記入ください”という教示のもと、以下の3つの質問について、自由記述での回答を求めた。

- (1) 片づけをする時: “あなたが片づけをするのは、どんな時ですか”
- (2) 片づけをする理由: “あなたが片づけをするのはなぜですか”
- (3) 片づけによる効果: “片づけには、どんな効果があると思いますか”

なお、片づけについて、同一の認識での回答を得るために“片づけとは、『いらぬ物を減らし、いる物を分類、整頓する行動』のことで”と、片づけの定義を記載した。

結果

自由記述の分類結果

各質問において得られた回答記述数は、“片づけをする理由”175個、“片づけによる効果”171個、“片づけをする時”198個であった。“片づけをする理由”、“片づけによる効果”、“片づけをする時”のそれぞれの自由記述回答について分類を行った。分類は、心理学を専門とする大学教授1名と心理学を専攻する大学院生1名の合議によって行った。複数記述していた分析対象者の回答については、各記述を分類した。

“片づけをする理由”についての記述の分類

どのような理由で片づけをしているのかを検討するために、“片づけをする理由”についての自由記述回答を分類した結果、11個のカテゴリに分類された(Table 1)。“片づけをする理由”において最も多く記述が分類されたカテゴリは、“部屋が散らかっている・汚いから”(24%)であり、“部屋がきれいだと気分・気持ちが良いから”(23%)、“部屋が散らかっている・汚い状態だと不快だから”(19%)、“生活しやすくするため”(19%)が続いて多かった。

Table 1
 “片づけをする理由” についての記述の分類結果

カテゴリ	記述例	記述数	記述された割合
部屋が散らかっている・汚いから	部屋が汚いから	30	24%
部屋がきれいだと気分・気持ちが良いから	きれいな方が気持ちが良いから	29	23%
部屋が散らかっている・汚い状態だと不快だから	部屋が汚いのが嫌だから	23	19%
生活しやすくするため	きれいにした方が生活しやすいから	23	19%
部屋が散らかっている・汚い状態だと不便・支障があるから	部屋が汚いと、どこに何があるか分からなくて困るから	22	18%
心理的な変化のため	気分をリセットしたいから	18	15%
誰かが来る・誰かから指摘されるから	人が来るから	11	9%
物が多い（増えた）・不要な物を減らすため	物が多すぎるから	9	7%
気分・気が向いたから	気が向いたから	4	3%
暇だから	暇だから	2	2%
その他		4	3%
合計		175	

注) 記述された割合は、分析対象者全体の人数に対する比率。

Table 2
 “片づけによる効果” についての記述の分類結果

カテゴリ	記述例	記述数	記述された割合
リフレッシュ効果	リフレッシュ効果	51	41%
生活しやすくなる（便利になる）	生活しやすくする	32	26%
心の癒し・リラックス効果	心の癒し	30	24%
部屋がすっきりする（きれいになる）	部屋がキレイになってスッキリする	16	13%
健康・清潔・衛生	清潔感が出る	16	13%
やる気・意欲	やる気が出る	11	9%
満足感・達成感	達成感を得られる	11	9%
継続効果	習慣になる	2	2%
何も思わない		2	2%
合計		171	

注) 記述された割合は、分析対象者全体の人数に対する比率。

Table 3
 “片づけをする時” についての記述の分類結果

カテゴリ	記述例	記述数	記述された割合
部屋が散らかった・汚れた時	部屋が散らかっている時	40	32%
暇な時・時間がある時	暇な時	30	24%
気分・気が向いたとき	気が向いた時	23	19%
誰かが来る時・親に指摘された時	人が来る時	22	18%
物が増えた（多い）・不用品やゴミが出た時	物が増えた時	21	17%
部屋の状況に不便さ・支障がある時	部屋での生活に支障が出ると認識した時	20	16%
心理的な変化を求めている時・何かの節目	すっきりしたい時	18	15%
やらなければいけないことの前や合間	テスト前	11	9%
部屋の状況が不快な時	自分で部屋を見て不快に感じた時	5	4%
その他		8	6%
合計		198	

注) 記述された割合は、分析対象者全体の人数に対する比率。

“片づけによる効果”についての記述の分類

片づけにどのような効果があると思われるのかを検討するために、“片づけの効果”についての自由記述を分類した結果、9個のカテゴリに分類された (Table 2)。“片づけの効果”において最も多く記述が分類されたカテゴリは、“リフレッシュ効果” (41%) であり、“生活しやすくなる (便利になる)” (26%)、“心の癒し・リラックス効果” (24%) が続いて多かった。

“片づけをする時”についての記述の分類

どのような時に片づけをするのかを検討するために、“片づけをする時”についての自由記述回答を分類した結果、10個のカテゴリに分類された (Table 3)。“片づけをする時”において最も多く記述が分類されたカテゴリは、“部屋が散らかった・汚れた時” (32%) であり、“暇な時・時間がある時” (24%)、“気分・気が向いたとき” (19%) が続いて多かった。

数量化Ⅲ類の分析結果

“片づけをする理由”、“片づけによる効果”、“片づけをする時”の関連について検討するために、数量化Ⅲ類による分析を行った。分析に

あたって、まず、自由記述回答を、各カテゴリ (Table 1, Table 2, Table 3) に該当する場合は1、該当しない場合は0としてコーディングを行った。なお、項目の0と1の比率が極端な場合、その項目によって全体の布置が歪む可能性が考えられる (喜入・久保田・新岡・越智, 2017)。そのため、記述された割合が10%未満の項目は分析そのものには含めなかった。

その後、数量化理論Ⅲ類によって、数量1・2軸のカテゴリスコアを算出した。固有値は順に.45, .36であった。2次元での累積寄与率は20.80%であった。カテゴリスコアのプロット図をFigure 1に示した。第1軸は、正の方向に“部屋がきれいだと気分・気持ちは良いから”が、負の方向に“部屋が散らかっている・汚い状態だと不快だから”が布置されたことから、部屋の状況に対するポジティブ・ネガティブ感情の軸であると解釈された。第2軸は、正の方向に“心理的变化のため”などの項目が、負の方向に“生活しやすくなる (利便性) 効果”などの項目が布置されたことから、心理的・利便的の軸であると解釈された。

数量化Ⅲ類におけるカテゴリプロット図から、第1象限に布置されるタイプ、第2象限と

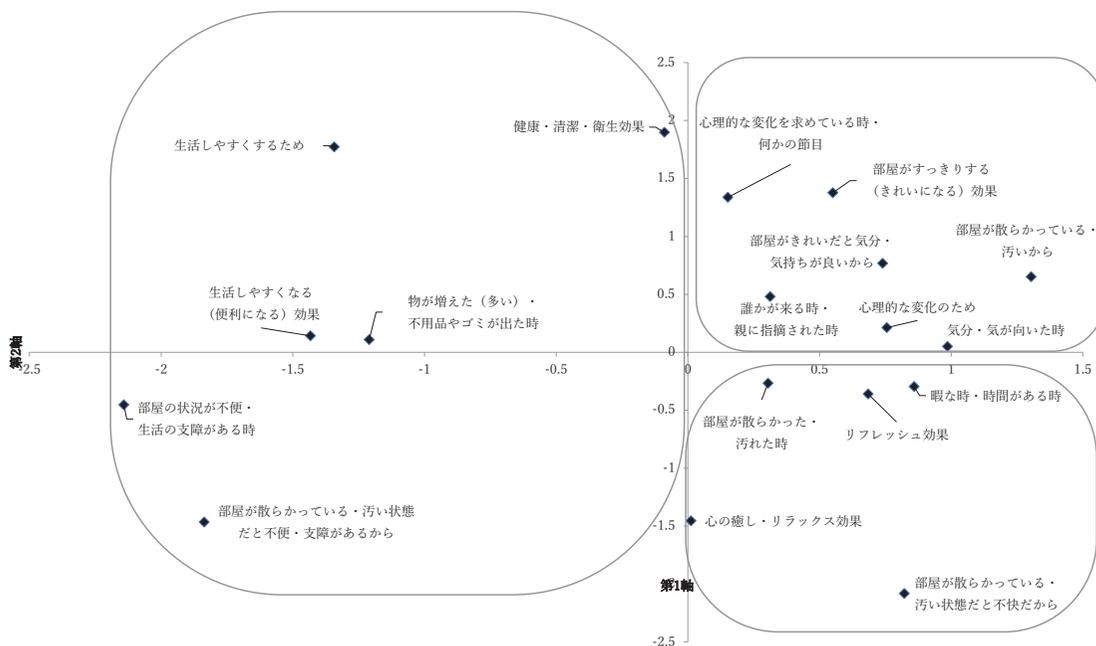


Figure 1 “片づけをする理由” “片づけによる効果” “片づけをする時” の数量化Ⅲ類の結果 (カテゴリスコアのプロット)

第3象限にまたがるタイプ、第4象限に布置されるタイプが考えられる。各タイプの特徴と命名は次の通りである。

第1象限のタイプの特徴は以下の通りである。“片づけをする理由”については、“部屋がきれいだと気分・気持ちが良いから”、“散らかっている・汚いから”、“心理的な変化のため”が布置された。“片づけによる効果については”、“部屋がすっきりするから (きれいになる) 効果”が布置された。“片づけをする時”については、“心理的な変化を求めている時”、“誰かが来る時・親に指摘された時”、“気分・気が向いたとき”が布置された。第1軸 (部屋の状況に対するポジティブ-ネガティブ感情の軸) のポジティブ方向、第2軸 (心理的-利便的) の心理的方向に位置しているため、『ポジティブ感情接近型』と命名した。

第2象限と第3象限にまたがるタイプの特徴は以下の通りである。“片づけをする理由”については、“部屋の環境を良くする (生活しやすくなるため)”、“部屋が散らかっている・汚い状態だと不便・支障があるから”が布置された。“片づけによる効果”については、“生活しやすくな

る (便利になる) 効果”、“健康・清潔・衛生効果”が布置された。“片づけをする時”については、“物が増えた (多い)・不用品やゴミが出た”、“部屋の状況が不便・生活に支障がある時”が布置された。第1軸 (部屋の状況に対するポジティブ-ネガティブ感情の軸) の両方向、第2軸 (心理的-利便的) の利便的方向に位置しているため、『利便性重視型』と命名した。

第4象限のタイプの特徴は以下の通りである。“片づけをする理由”については、“部屋が散らかっている・汚いと不快だから”が布置された。“片づけによる効果”については、“リフレッシュ効果”、“心の癒し・リラックス効果”が布置された。“片づけをする時”については“部屋が散らかった・汚れた時”、“暇な時・時間がある時”が布置された。第1軸 (部屋の状況に対するポジティブ-ネガティブ感情の軸) のネガティブ方向、第2軸 (心理的-利便的) の心理的方向に位置しているため、そのため、『ネガティブ感情回避型』と命名した。

考察

本研究では、大学生を対象に片づけの動機に

ついて明らかにすることを目的に、質問紙調査を実施した。片づけの動機を多面的に捉えるために、“片づけをするのはなぜか(片づけをする理由)”, “片づけにはどのような効果があるか(片づけによる効果)”, “片づけをするのはどんな時か(片づけをする時)”という3つの質問についての自由記述から探索的に検討した。

各自由記述の分類結果

各質問に対する自由記述回答を分類したところ、“片づけをする理由”は“部屋が散らかっている・汚いから”, “片づけの効果”は“リフレッシュ効果”, “片づけをする時”は“部屋が散らかった・汚れた時”が、それぞれ最も多く分類されたカテゴリであった。

“片づけをする理由”では“心理的な変化のため”, “片づけの効果”では“リフレッシュ効果”や“心の癒し・リラクセス効果”, そして, “片づけをする時”では“心理的な変化を求めている時・何かの節目”という心理的な内容に言及した記述がそれぞれ見受けられた。このことから, 片づけの動機には心理的な意味合いが強くなることが示唆された。

数量化Ⅲ類の結果

数量化Ⅲ類の結果, 『ポジティブ感情接近型』, 『利便性重視型』, 『ネガティブ感情回避型』の3つのタイプが見出された。

本研究で捉えた3つの観点(“片づけをする理由”, “片づけによる効果”, “片づけをする時”)は, 次のように考えることができる。すなわち, “片づけをする理由”や“片づけによる効果”についての回答は, 個人が普段から持っている信念である。そして, “片づけをする時”についての回答は, 片づけをする契機となる事柄や条件である。このことから, 片づけは, 個人の信念(“片づけをする理由”や“片づけによる効果”)を前提として, 契機となる事柄や条件があった時(“片づけをする時”)に行われると考えられる。それを踏まえた上で, 各タイプの特徴をまとめると次のようなことが推察される。

『ポジティブ感情接近型』(第1象限)の特徴は, 片づけをする理由は“心理的な変化のため”や“部屋が散らかっている・汚いから”, “部屋

がきれいだと気分・気持ちは良いから”であり, 片づけをすることには“部屋がすっきりする(きれいになる)効果”があると考えており, “心理的な変化を求めている時・何かの節目”や“気分・気が向いた時”, “誰かが来る時・親に指摘された時”に片づけをすると推察される。

『利便性重視型』(第2象限・3象限)の特徴は, 片づけをする理由は“部屋の環境を良くする(生活しやすくするため)”や“部屋が散らかっている・汚い状態だと不便・支障があるから”であり, 片づけをすることには“生活しやすくなる(便利になる)効果”や“健康・清潔・衛生の効果”があると考えており, “物が増えた(多い)・不用品やゴミが出た時”や“部屋の状況が不便・生活の支障がある時”に片づけをすると推察される。このタイプは, “片づけをする理由”“片づけによる効果”“片づけをする時”いずれにおいても, 利便性が重視されていると考えられる。

『ネガティブ感情回避型』(第4象限)の特徴は, 片づけをする理由は“部屋が散らかっている・汚いと不快だから”であり, 片づけをすることには“リフレッシュ効果”や“心の癒し・リラクセス効果”があると考えており, “部屋が散らかった・汚れた時”や“暇な時・時間がある時”に片づけをすると推察される。

以上のことから, 個人が普段考えている“片づけをする理由”や“片づけによる効果”により, 片づけを行う契機となるような事柄が異なっていることが示唆された。

小・中・高校生と大学生の“片づけをする理由”の違い

中西他(2006)の先行研究においては, 小・中・高校生が部屋を片づけて整理整頓する理由の上位には, “見た目”“使いやすさ”“居心地”“人の目”があげられていた。本研究における大学生の“片づけをする理由”についての回答の上位にあげられたカテゴリは, 最も回答数の多かった“部屋が散らかっている・汚いから”は“見た目”, 続いて多かった“部屋がきれいだと気分・気持ちは良いから”や“部屋が散らかっている・汚いと不快だから”は“居心地”, そして“生活しやすくするため”や“部屋が散らか

っている・汚い状態だと不便・支障があるから”は“使いやすさ”と対応する内容であると考えられる。上記の3つは小・中・高校生においても大学生においても共通した“片づけをする理由”であると推察される。

小・中・高校生の回答で上位にあげられた“人の目”に対応すると考えられる、大学生の“誰かが来る・誰かから指摘される”というカテゴリに含まれる回答が記述されたのは全体の9%と低い割合であった。ただし、“片づけをする時”については、“誰かが来る時・親に指摘された時”が18%の割合で回答されていた。つまり、片づけをする契機としては、他者からの影響を受けているものの、“誰かが来る・誰かから指摘されるから”ということが“片づけをする理由”であるという意識は低いということが示唆された。一方で、小・中・高校生の回答では上位にあがらなかったが、本研究における大学生の“片づけをする理由”では“心理的な変化のため”というカテゴリに含まれる回答が15%と“誰かが来る・誰かから指摘される”よりも高い割合で記述されていた。

大学生になると、外的な評価や競争的な側面は弱くなり、単に興味や重要性にもとづく動機づけを持つようになると考えられる(岡田, 2010)。そのため、大学生における“片づけの理由”では、“誰かが来る・誰かから指摘される”という外的な影響が理由として意識される割合は低くなり、“心理的な変化のため”という内的な理由を意識する割合が高くなっているのではないかと考えられる。

片づけをすることのそもそもの目的は、生活空間を整え、快適に生活できるようにすることであるが、近年では、多くのメディアで、片づけをすることによって“心理的な変化”が得られるという考えが広まっている。こうしたメディアに触れる機会や実際に片づけをしたことで心理的な変化が得られたという経験があって、はじめて“片づけをする理由”として“心理的な変化のため”という意識がもたれるのではないだろうか。大学生は、小・中・高校生よりも多くの情報に触れたり、多くの経験をしていることで、“心理的な変化のため”という回答が多く割合でみられた可能性が考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題として2点あげられる。第1は、研究対象者についてである。これまで片づけの動機に関連する研究では、青年期以降を対象としたものがみられないため、本研究では、大学生を対象に片づけの動機づけについて検討した。しかし、大学生という限定された対象では、青年期以降の片づけ動機について見解を述べるには十分とはいえない。今後は、さらに成人期など対象を拡張して検討することが望まれる。

第2は片づけ動機と実際の片づけの関連について検討していない点である。本研究では、片づけを動機について検討を行ったが、片づけ動機が実際の片づけとどのように関連しているのかを明らかにしなければ、片づけ動機が片づけを促しているということができないと考えられる。そのため、今後は、本研究で得られた片づけ動機の項目を用いて、実際の片づけとの関連を明らかにしていくことが課題である。

引用文献

- 郷古 学・金 天海 (2015). テーブル上の物体の片付けを人に促すためのロボットの行動 人工知能学会全国大会論文集, 29, 1-4.
- 池内 裕美 (2014). 人はなぜモノを溜め込むのか—ホーディング傾向尺度の作成とアニミズムの関連性の検討— 社会心理学研究, 30, 86-98.
- 池内 裕美 (2018). 溜め込みは何をもたらすのか—ホーディング傾向とホーディングに因る諸問題の関係性に関する検討— 社会心理学研究, 34, 1-5.
- 鹿毛 雅治・櫻井 茂男・中谷 素之・浅川 希洋志・伊藤 忠弘・無藤 隆・金 壽宏 (2011). 動機づけの心理学—その成果と課題— 教育心理学年報, 50, 31-34.
- 喜入 暁・久保田 はる美・新岡 陽光・越智 啓太 (2017). 日本における連続殺人事件の類型と単一殺人事件との比較 心理学研究, 87, 633-643.
- 戀津 魁・安藤 健翔・神山 大輝・細川 慎一・日置 優介・渡邊 賢悟・伊藤 彰教・近藤 邦雄 (2013). ハノイの本 映像メディア学会技術報告, 37, 169-170.
- 元井 沙織・小野寺 敦子 (2018). 大学生の片づけ行

- 動に及ぼす両親の影響—片づけ要求と片づけ態度からの検討— 目白大学心理学研究, 14, 45-55.
- 中西 雪夫・財津 庸子・柳 昌子・長山 芳子・小林久美・松園 美和・鈴木 明子・赤崎 眞弓・西野祥子(2006). 児童・生徒の家庭生活における意思決定の背景(第3報)—住まうことについての意識分析— 日本家庭科教育学会誌, 49, 113-122.
- 滑田 明暢・田村 彩佳・望月 昭(2017). 家庭内の片づけ行動の促進—トークンエコノミーの導入と物理的環境設定の効果の検討— 日本家政学会誌, 68, 598-608.
- 中谷 素之・田中 あゆみ・伊藤 嵩達・外山 美樹・大坊 郁夫・鹿毛 雅治(2018). 学習動機づけの未来—教育心理学研究における動向とこれから— 教育心理学年報, 57, 250-257.
- 岡田 涼(2010). 小学生から大学生における学習動機づけの構造的変化—動機づけ概念間の関連性についてのメタ分析— 教育心理学研究, 58, 414-425.
- 大即 洋子・澤田 伸一・坂東 宏和・馬場 康宏・小野 和(2007). 保育におけるコンピュータを遊具の1つとして利用する試み 情報処理学会論文誌, 48, 3415-3425.
- 齋藤 正樹(2015). パフォーマンス・フィードバックが片付けの自己管理に与える効果 人間学研究, 20, 95-104.
- 土屋垣内 晶・黒宮 健一・五十嵐 透子・堀内 聡・安藤 孟梓・鄧 科・吉良 晴子・津田 彰・坂野雄二(2015). ためこみ傾向を有する日本の青年の臨床的特徴 不安症研究, 6, 72-85.
- 上淵 寿(編著)(2012). キーワード 動機づけ心理 金子書房, pp.4-6.

—2019年9.27.受稿, 2019年12.7.受理—

The exploratory research for tidy-up motivation of university students

Saori Motoi

Mejiro University, Graduate School of Psychology

Atsuko Onodera

Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2020 vol.16

【Abstract】

In this study, we conducted a questionnaire survey with free description to clarify the tidy-up motivation of university students. The survey subjects were 126 university students. When classified by free description, “reason for tidy-up” is “the room is messy / dirty”, “effects of tidy-up” “Refreshing effect”, “when tidy-up” is “when the room is messy / dirty” was the most classified category. In each question, there was a description referring to psychological content; “reason for tidy-up” is “for psychological change”, and “tidy-up effect” is “refresh” “effective” and “Healing / relaxing effect”, “when tidy-up” is “when seeking psychological change / some milestone”. This suggested that tidy-up has a strong psychological implication. The classified categories were analyzed by quantification type III. It was suggested that the things that trigger for the tidy-up differ depending on the “reason for tidy-up” and the “effect of tidy-up” that individuals usually think.

keywords : motivation for tidy-up, when tidy-up, reason for tidy-up, effect of tidy-up